

令和2年度 丹波市食育推進会議議事録（要旨）

- 日 時：令和2年10月6日（火） 午後1時30分開会～午後3時30分閉会
場 所：丹波市健康センターミルネ 2階プレイルーム
出席者委員：逢坂 悟郎委員（代理：西岡美和子氏）、吉竹 克之委員、藤原 秀樹委員、岸本 芳樹委員、植木 淳子委員、藤本真里子委員、細見 隆昭委員、足立 幸広委員、遠藤 圭織委員、足立 裕子委員、都田紀代美委員、田畑 保子委員、大西 圭子委員
欠席者委員：平島 顕委員、太矢 信昭委員、秋山佐登子委員、吉田 拓洋委員、矢持 章一委員、中澤 正樹委員
議 事：1) 令和2年度食育活動について
2) 丹波市食育推進会議の成果と課題
3) 丹波市食育推進会議のあり方について
4) その他
資 料：【資料1】第7期丹波市食育推進会議委員、食育推進チーム委員名簿
【資料2】丹波市食育推進会議設置条例
【資料3】令和2年度食育事業進捗状況
【資料4】丹波市食育推進会議・丹波市食育推進計画策定の経過
【資料5】第2次丹波市総合計画
【資料6】健康たんば21（第2次計画）

1 開会

2 委嘱書の交付（藤原 秀樹委員、細見 隆昭委員、遠藤 圭織委員）

3 あいさつ

<事務局>

本来なら早い時期に食育推進会議を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響でいろいろな会議が自粛となった。1月28日の昨年度最後の会議以降から、世界中で新型コロナウイルスが流行し日本にも入ってきて、学校が休校になるという経験したことがないことが生じ、今年は大変な年となった。休校に伴い2月28日に初めての新型コロナウイルス感染症対策本部会議を開き、丹波市で発生した場合にどのように対応するのかを協議している最中の3月9日に、1人目の感染者が発生。それまでに協議を重ねてきたため、市民への周知方法等は予め分かっていたが、実際に発生してからは怒涛の日々が始まった。4、5、6月はあっという間に過ぎた気がする。その間はすべての事業が止まったので、いろいろなことを見直すことができた。そして一番大きかったのは、手洗いとうがいをするようになったので、昨年度のインフルエンザは例年の半分以下の発生で、夏風邪も流行らなかった。手洗い、うがい、顔を触らないことは感染症を防ぐ一番大きなことだと実感した。これから感染症が流行する季節になるが、これらのことを続けていきたい。そして何よりも、しっかり美味しいものを食べて免疫をつけることはとても大切なので、この会議でそのことを見直せたら嬉しく思う。今年もよろしく願いいたします。

4 委員紹介及び事務局職員紹介

資料1に基づき名簿を確認いただきたい。（欠席委員の報告）

5 丹波市食育推進会議の役割

<事務局>

本日の会議成立の確認をする。

資料2の条例により、会は過半数以上の出席をもって成立となる。

委員19名のうち、12名の出席、7名の欠席である。過半数を超えていることより、会が成立することを確認する。

6 会長あいさつ

<会長>

この後、報告・協議事項に入るが、「(3) 丹波市食育推進会議のあり方について」では、これまで14年間行ってきた食育推進会議について、「(2) 丹波市食育推進会議の成果と課題」で総括をしながら、今後の展開を意見交換できればと考えている。

7 報告・協議事項

(1) 令和2年度食育活動について

<会長>

それではこれより協議・報告事項に入る。例年通りに実施できなかった事業も多々あると思うが、資料3に基づき報告願う。

<健康課>

新型コロナウイルス感染症への対応等で、4、5月の集団で行う事業については中止を余儀なくされた。しかし必要に応じて、感染症防止対策に配慮しながら個別相談は実施。

・1ページ①「乳幼児健康診査等での栄養相談」

事業の延期に伴い、4、5月は主に電話相談で対応。6月から順次健診を再開し、現在は通常通りで実施。検温、換気、消毒の徹底、会場内が密にならないように受付時間を分散するなどの対策をしている。

・同②「離乳食教室」

4、5月は中止。中止期間中に離乳食開始時期を迎える児もいたため、希望者には教室での配布資料を送付し、電話で説明。6月から再開したが、2回に分けて少人数で実施している。試食の提供は今年度中止。また、離乳食づくりの手順を動画にして丹波市のホームページで公開している。

・2ページ⑦「小学生食育教室」、⑧「中学生食育教室」

いずみ会に実施依頼している教室。ごはんのみそ汁を作れる基本的な調理技術を身に付けることで、将来の子どもたちの食の自立を目指している。学校での食育教室であり、休校期間が長期にわたったため、学校側に都合をつけて頂くのが難しい状態。また調理台を囲んだ形での調理実習や試食は、十分な感染症防止対策が必要になることから、既に実施の見合わせを決めた学校が多数ある。そのため調理実習を行わない食育活動の方法を検討し、今年度はまず小学生を対象に、ごはんのみそ汁の作り方を詳しく示したリーフレットと調理動画の作成を、いずみ会と協議しながら行っている。実習の中止が決定した小学校には、朝ごはんアンケートの実施のみを依頼し、作成したリーフレットと動画をお届けしたいと計画している。中学校についても実施ができない場合は、アンケートと兵庫県で作成されているパンフレットをお届けする予定。

・4ページ①「乳幼児健診等における歯科指導・相談」

延期した健診の再開に伴い、実施。感染防止対策を行った上で、指導をして頂いている。

・同②「5歳児歯科教室」

児の口の中を染色して、歯科衛生士が歯磨き指導をする教室。感染防止対策が難しいため、実施は見合わせている。啓発資料は園へ届けた。

・5ページ①「高校生食育教室」

時間確保が難しく、氷上高校の1クラスのみの実施になる予定。学校に実習マニュアルがあり、調理台1台につき2名の生徒が使用する形で大人数にならないようにし、2日間に分けて実施を計画している。

・同(2)生活習慣病予防、重症化予防、6ページ(3)高齢期の低栄養予防

調理実習を伴う事業は、一部参加人数を制限する形で実施。個別相談、保健指導、健診事業等については、予定通り実施。

・11ページ(1)食育月間・食育の日の取り組み、(2)食育に関する情報発信

啓発や広報活動は予定通り実施しているが、多数人が集まるイベント等における食育フェアについては中止。広報や資料等での啓発のみとしている。

・12ページ②「丹波市食育推進会議」

例年は1回目を6月に実施していたが、今年度は6月の実施が難しく本日実施。

<学校教育課> 「学校教育課」、「各学校」と記載された事業を担当

それぞれの学校で食育の年間計画を立て、教育活動全体を通じて食育の推進を実施。給食指導を含め、各教科において食育を授業に取り入れ、充実に努めている。今年度は、給食時の感染防止対策にも取り組んでいる。例年6月に学校教育課を通じて、各学校に食育に関する取り組み状況の調査を行っているが、6月が学校再開の時期と被ったため10月に延期。これからの調査となるため、進捗状況についての記載はできていない。

<子育て支援課>

毎年、学習センターや児童館で離乳食教室やクッキング教室を実施していたが、4、5月は学習センター、児童館を臨時休館とした。現在は利用可能時間を制限しながら再開している。年2回実施をしていた児童館での食育クッキングは、今年度中止。しかし学習センターでの調理教室、グループ活動は、感染症防止対策を行いながら少しずつ再開。野外での焼芋大会は、今後実施予定。離乳食教室は相談会の形で実施。アフタースクールでの調理実習は中止したが、作って頂いたカレーを食べる機会を作った。子どもたちは密集しがちであるが、配慮を行いながら実施している。

<農業振興課>

予定通り実施できたものや、縮小、中止した事業もある。

- ・10ページ⑥「丹の里・丹波市「味覚フェア」たんぱルシェ2020」は、5、10月は中止。1月も中止の方向で検討中。

- ・同①「丹波大納言小豆を使ったぜんざいフェア」は、人が集中しないこと、店も感染症対策を行っていることを踏まえ、例年通り実施予定。期間は令和2年11月3日～令和3年2月18日で、市内の約30店舗が参加予定。緊急事態宣言により中止の場合あり。

- ・食農教育の推進として、学校給食に丹波大納言小豆を取り入れてもらい、市内の小中学生に地元の特産物等の理解を深めてもらう予定。また、いずみ会の協力を得ながら中学生食

育教室を実施している。

<学事課>

学校休校により、予定していた食育の計画を変更することが多かった。休校中は、子どもたちに料理や食育に関心を持ってもらうために、給食センターから給食のレシピ等を掲載したお便りを学校に配信。家で過ごす時間が多いため、家族と一緒に料理を楽しむ機会になっていれば嬉しく思う。6月半ばから給食を再開したが、感染症予防対策が必要になることから、例年通りの給食時間を過ごすことは難しい状態。給食を通して、日本の行事や自分の食事量等を感じ取ってもらえたらと思う。栄養教諭による給食時間の訪問指導は当面中止しているが、感染症がおさまれば再開したい。毎日、学校と連絡ノートのやり取りをしており、給食時間の様子を知る手段になっている。授業時間や朝会で食育の指導を実施。必要に応じてZoomやテレビを使用。新型コロナウイルスの影響で様々な制限があるが、子どもたちに食べることの大切さや楽しさを知ってもらえるような食育を進めていきたい。

<会長>

以上、各課より説明があったが、これから離乳食教室といずみ会の動画を見て頂く。

<事務局> 動画紹介

・離乳食教室

離乳食教室参加者には、ネット等からの情報が沢山ありすぎて、基本が何かが分からずに来られている人も多い。そのため実際に調理の様子を見て離乳食を進めて頂けたらという思いで実施している。

・いずみ会

動画では、炊飯器での炊飯方法、鍋での炊飯方法、出汁のとり方、みそ汁の作り方を紹介。

学校での実習は、ガラスの鍋を使って炊飯をしている。鍋で炊くときは、計量カップがなくても近くにある容器を使って、洗米した米と同じ容量の水を加えると炊くことができるので、災害時にこの方法を知っていると炊飯できることも加えて伝えている。米の様子が変わっていくところや、炊けていくときの匂いが教室全体に広がって、子どもたちも楽しそうに実習をしているが、今年度は実習ができない状況にあるため、この動画とレシピを一緒にお届けしたいと思っている。お家で過ごす時間が増えた今、お家の方と一緒に鍋での炊飯もしてもらえたらと思い、このような媒体を現在作成している。

<会長>

以上、事務局より令和2年度食育活動についての説明があったが、質問、意見、感想等を頂きたい。

<委員>

いずみ会動画について、最後に3秒強火にするのはなぜか。

<職務代理>

余分な水分を逃すためです。

<会長>

関連して補足等があれば頂きたい。

<職務代理>

このような時期に、いずみ会は何ができるのかという思いがずっとあり悩んでいたが、事

事務局からこのような提案をしてもらえたので嬉しかった。これが、お家でお母さんやおばあちゃんと一緒に料理をしてもらえらるきっかけになれば凄く嬉しく思う。

<会長>

いずみ会とは中学校食育教室ということで、地元食材を使った和食の一汁二菜で調理実習をしてもらっている。初年度は実施している学校が1, 2校くらいだったが、徐々に広がり市内の全中学校で実施できるようになった。氷上中学校は生徒数が多く5クラスのこともあったが、応援に来てもらいながら実施できた。

県内や全国規模の会議等では、丹波市はこのようなことをしていると伝えている。

単に調理実習をするだけではなく、地元食材や和食について紙芝居で教えてもらったり、魚のさばき方のデモンストレーションを見せてもらうなど、とても良い学習ができています。今回コロナの影響で実施できなくて残念だが、2グループに分けて実施予定のところがあることは初めて聞いたので、感心した。1クラス38名を2つに分けるとなると大変だが、実施する分だけ効果がでると思うので良いのでは。来年度はどうなるか分からないが、ぜひ続けていってほしい。

この会議でいずみ会との連携がはかれるようになり、3, 4年かかって全校で実施できるようになったことは、この会議の1つの成果とも思う。

<委員>

学校でもらった給食のお便りに載ったレシピを作ったりして、逆に休校中の時間を大事にできたので、そのような情報提供はありがたかった。

離乳食動画についてもネットで見たが、手元が見れて分かりやすかった。1人目のお母さんなど分からない方が周りにおられたので、「このような動画があるよ」ということを紹介した。ネットなどでは色々な情報がある中で、市として信用できる媒体を作成していることが良いと思った。

いずみ会動画は、一般の人でも見られるのか。

<事務局>

動画出演者の許可が必要になるが、許可がおりればホームページにアップしたい。

離乳食動画の見方は、丹波市のホームページにアクセス後、キーワード検索で「離乳食動画」と入力すると視聴可能。また乳幼児健診の対象者には、動画のQRコードを資料に添付して配布している。

いずみ会動画についても、レシピ資料にQRコードを付けて家でも見られるようにするなどの検討もしていきたい。

<会長>

発信の方法としては対面もあるが、コロナが収束してもオンラインが残せるところは残していけばよい。丹波市の岸田教育長は、コロナが終わった後は、コロナ前と全く同じには戻るはずがないとも話されている。学校はオンライン化を進めていくし、対面も進めていく必要がある。両方のハイブリッド化の教育になるだろう。

<委員>

子どもが5年生の時に調理実習をお世話になった。どの学校においても、地域の方と一緒に調理実習ができるような体験を提供して頂いていることに感謝している。今年はコロナの影響で実施が難しいが、今後も継続してお世話になりたい。

学校ではICTが進んでおり、2月には1人1台のタブレット端末を持って勉強するようになる。調理実習の様子を動画撮影したり、レシピ検索もできると思う。食育でも活用させていきたい。

<事務局>

コロナのおかげで、これまで想像しなかったことができるようになったと思っている。離乳食動画も、子どもたちが成長していくなかで事業をずっと止めなければならないのはとても悔しく、また離乳食づくりが初めてのお母さんは市役所から教室が中止でできないと言われると不安で仕方がないのではないかという話の中で、栄養士が考えて作成した。

子どもたちは自然学校で初めて魚をさばくが、その自信が中学校の授業で1匹の魚をさばく勇気につながると聞いたこともある。食育は小さいころからの積み重ねで、自分がしてきた経験が次の経験につながることを、この会議の中で皆さんの意見を聞いて思った。幼児期からいろいろな体験をしたり親に教えてもらうことがとても大事だと思う。コロナで子どもたちはお父さん、お母さんと接することが増えた。少し方向を変えるだけで子どもたちの関心が湧き、嫌いな食べ物でも食べられたりする。本当にきっかけだと思う。

この半年間は良い大きな体験をした。これを皆さんに発信しながら、次のコロナの時代に向けてどうかを考えなければいけないと思っているので、皆さんのいろいろな体験をぜひ教えていただき、行政に反映したい。よろしく願いいたします。

<委員>

孫は、今年自然学校で魚の体験ができなかった。しかし家族で釣りに行くこともあり、上手に魚をさばけるようになってきた。家族でいる時間が多い分、家族から教えてもらうことや家族と一緒に取り組むことが増え、経験できなかったことができた。

来年は、コロナと付き合いながら上手にいろいろな会ができればと思っている。

(2) 丹波市食育推進会議の成果と課題について

<会長>

それでは「(2) 丹波市食育推進会議の成果と課題について」と併せて「(3) 丹波市食育推進会議のあり方について」を協議する。

事務局から説明をお願いする。

<事務局>

資料4「丹波市食育推進会議・丹波市食育推進計画策定の経過」に沿って振り返る。

国では食育を社会問題ととらえ、「食育とは生きる上での基本であり食育を国民運動として取り組む」ということで、平成17年7月に食育基本法を施行し、平成18年3月には食育の推進に関する施策の推進を図るために食育基本計画を策定。それに伴い、都道府県や市町村においても食育推進会議を設置し、地域の実状を踏まえた食育推進計画の策定が進められている。丹波市では当時の農林振興課が食育主管課となり、計画作成への取り組みを始めた。平成18年6月に、まず市内の関係者を参集して第1回食育チーム委員会を開催、9月には第1回食育推進会議を開催。14回のチーム委員会と8回の食育推進会議を重ねて、平成19年12月に食育推進計画を策定した。これは丹波の自然の恵みを十分に活用した食育の推進を目指したものである。計画策定後は、年に2回程度の食育推進会議を開催しながら進捗状況を確認し、施策の推進に取り組んでいる。平成24年からは食育主管課が健康課に移り、前年度実施のアンケート結果等を用いながらこれまでの取り組みの評価を行った。1次計画の中で、郷土料理を知っている・作っている人の割合、丹波市産の農産物の生産、適正体重を維持している人の割合、農業体験を実施している学校の割合等について、数値の改善が見られた。しかし、食への関心が低い20～40代の若い世代の食の課題が多いことを確認。家庭、地域、学校など食育に取り組む関係機関・団体等が連携を密にして、「若い世代」と「食と農」をキーワードに平成25年3月には食育推進計画第2次を策定し食育推進に取り組んだ。毎年の食育推進会議を重ね、平成30年3月に第3次食育推進計画(現在の計画)の策定にいたる。

これまでの取り組みで、「食育」という言葉が浸透してきたと思う。食育の周知だけではなく実践、食育体験の場が大きく広がってきた。子どもたちの食育体験、料理だけではなく生産・収穫などの農業体験もずいぶん増えてきている。給食を通じた食育、食に関する授業なども学校で沢山取り組まれている。地域や食育ボランティアと連携した食育体験の場も拡大している。

資料4 表の右側「食育の広がり例」

第1回目の中学校食育教室は、平成20年に山南中学校で開催。以降少しずつ実施校を広めながら、平成30年からは市内7中学校の2年生を対象に食育教室を開催できるまでになった。小学校における食育教室の実施校も少しずつ広がりを見せ、また健康課では地域活動栄養士の協力を得ながら高校への食育活動も実施。公立3つの高校に食育講座として入っている。丹波市では小学校→中学校→高校と切れ目ない食育体験の場が、広がってきたのではないかと思う。平成17年に食育基本法が施行されたときに小学生であった子が、現在の20代の大半を占めている。食育の取り組みが広まった期間に育ってきた世代であり、若い世代は次の子育てをする貴重な年代層ではないかととらえている。栄養士、看護師、保健師の学生実習を健康課で受け入れることがあるが、その中に学校での食育教室や心の教室、防煙教室等を受けたことを覚えている人もいた。朝ごはんコンテスト等を開催する中で、そのような職業に就きたいと思ってくれる生徒もいた。ごく一部の人ではあるが、その中で伝わっているものがあるのだと実感している。

今の大人よりも子どもたちの方が沢山の学びをしながら育ってきているが、社会環境・ライフスタイルについてはより複雑化しているため、学習する機会があったから大丈夫という訳では決してないと思った。自分にとって丁度良い、バランスのよい食生活は、意識していかなければならない現状にあるため、今後も引き続き食育推進が大事であると感じている。

資料5

食育は、食育計画の中だけで行っている訳ではない。農業に関すること、教育に関すること、それぞれの部門で基本計画を持っており、その中で「食育推進」の文言が出てくる。それぞれの部局で健康づくり、教育、地産地消など数値目標を掲げて進めているため、今後も横の連携をはかりながらそれぞれの専門分野で、十分に食育を浸透していきたい。

<会長>

以上、これまでの経緯と食育の広がり例についての説明があった。いずみ会関連のことが多かったが、補足等があればお願いしたい。

<職務代理>

いずみ会活動については、各方面の方々にご協力を頂いてありがたく思う。いずみ会の食育は、学校だけではなくいろいろな年代に入るが、特に学校に入る場合にはとても緊張感を持っている。成人に対しては大部分の人が基本的なことを知っていらっしゃるため、それほど驚かせることはないと思うが、子どもに対してはあまりぶれたことを言うてはいけないという気持ちがあるので、事前打ち合わせに時間を費やすなど、会員自身のスキルアップも重要だと考えている。学校は敷居が高く感じるが、実際に行くと子どもと触れ合えて嬉しい。中学校は全校入ることができてありがたいが、小学校でも増やしていきたい。これまではそれぞれの地域単独で食育活動を実施してきたが、会員の高齢化もあるのでこれからは全地域から色々なところへ出向いて活動する形を考えていきたい。中学校食育は統一メニューで行ってきたが、小学校は各町ごとにメニューや対象が異なる。「料理はこれが絶対の方法ではないため、家でのやり方も聞いてね」と付け加えて話すことを心がけている。

<会長>

兵庫県教育委員会が食育実践推進に関する会議を持っている。幼児や小学生への食育は成果も見られてきており、ここ数年の課題であった中学校の食育をどうするのかということも進んできている。今年度より新たに高校の先生がメンバーに加わり、高校生での食育をどうするのが今の課題。丹波市では市内公立3校に入っているため、進んだ取り組みができてきていると思う。

神戸大学名誉教授の保田茂氏が1食分のご飯が炊けてみそ汁が作れるようにするということで、学校に入り教室をされていたりしている。そのような動きが広がって定着してきて、課題なども明確になってきた。今後、そういうところへもシフトしていければ良いと思う。

(3) 丹波市食育推進会議のあり方について

<会長>

それでは「(3) 丹波市食育推進会議のあり方について」に移る。

<事務局>

資料5

食育基本法が制定され、「食育」の言葉を初めて聞いた時に何をすることなのかと思っていましたが、「食べることは生きること、生きるとは育てていくこと」ということは赤ちゃんから高齢者まで同じであり、国も食育の実践・広がりを目指して計画を作り、それを都道府県単位、市町村単位で作るという中で、丹波市は第3次までの食育推進計画ができています。いずみ会や学校など皆様の協力でこのようなことが進んできている。

資料5はどのように広がり、どのような方面で計画ができてきているのかを示している。一番の上位計画は丹波市総合計画になる。その下に各種計画が位置する。

丹波市教育振興基本計画には、食育・健康教育の推進ということで①食に関する指導の充実、②健康課題に対応した教育の推進が掲げられている。

丹波市学校給食運営基本計画では、「食育の推進と学校給食の充実」ということで栄養教諭が給食の時間に訪問して指導するなど、どんどん食育の推進が進んできている。

丹波市農業・農村振興基本計画では、「丹波市ブランドを活用した元気な農業・農村づくり」ということで、楽農（楽しい農業）の推進として、学校で農の体験があったりJAさんが米作りなどで学校に入ってもらっていただけたりと色々なことが進んできている。

丹波市食育推進計画では、健康寿命の延伸に結び付く食育、地域への愛着をはぐくむ食育、妊娠期から高齢期までのライフステージごとの食育についても健康課が担当。

食育基本法に基づく計画が、各分野に明記されている。

資料6 健康たんば21計画（第2次計画）

市民の健康寿命の延伸（日常生活に制限のない期間を延ばす）の積み重ねで、丹波市が健康寿命日本一になってほしいという前市長の厚い思いでこの言葉が生まれた。健康寿命を延ばすにはどうしたらよいか逆算すると、65歳未満で亡くなる早世死亡の予防、要介護状態の予防、そのためには生活習慣病を重症化させないことが大切であり、いろいろな病気を予防するために健診や食育推進事業、食の啓発、いずみ会や愛育会の地区組織活動など、赤ちゃんから高齢者までの事業を健康課で実施。この計画を進めるにあたり、健康づくりをしていくための土台となるのが、「ぐっすり・すやすや運動」である。睡眠をしっかりとることが免疫力を高める・落とさないという点で、質の良い睡眠をとるために5つの重点分野を設けている。栄養・食生活、身体活動・運動、こころの健康、タバコ、健康診査・健康管理の5つの重点分野を睡眠という1つの大きな土台の中でしっかり組み立てて、将来的に健康寿命を延ばしていこうと思っている。

健康たんば21の第3次計画は、令和7年度中に立てていく。丹波市では食育推進計画を単独で立てているが、第3次計画では健康たんば21に食育推進計画も含めて、大きく健康

寿命延伸という視点でとらえていきたいと考えている。兵庫県下はもちろん、全国的にも人口規模の小さい市町では、健康たんば 21 に赤ちゃんのための計画、自殺対策基本計画、食育計画など、いわゆる健康分野が土台となって事業を展開するものについては、1 つに包含したものとして立てているところが多くなってきている状況である。

食育は今までの皆様のご協力のおかげで、市内に広がり小学校、中学校、高校にも食育教育がありということで、これらの事業は今後も変わりなく進めていくものになる。食育の分野でここはしっかりと練りたいということであれば、部会やワーキングチームをつくるなど、計画策定にあたってはそのような配慮をしていきたい。本日突然に聞いて、委員の皆様も戸惑っていらっしゃるかもしれないが、食育の計画が健康たんば 21 に含まれることと、2 つの委員会を 1 つにして来年度から協議をしていきたいということについて、委員の皆様のご意見をお聞かせ頂きたい。

<会長>

健康福祉推進会議に食育部門を包括して協議をしていくということであるが、いきなり全体の会議だけで食育のことを充実して協議できるかについては、分科会形式やワーキンググループを作ってその部分だけを取り出して協議をするのか、その点も含めてご意見があれば出していただきたい。

<委員>

食育推進会議の内容が大きな会議の中に含まれた場合に、目標が達成できるのであれば 1 つにして、必要に応じてワーキング会議などをしていけばよいと思うので、健康たんば 21 の中に含めていくという形で良いと思う。

<会長>

これで確定する訳ではないため、ご意見を出していただければ事務局で検討されるので、色々な意見を出してほしい。

<委員>

合併するにしましめないにしても、この食育推進協議会から生産者枠が無くなってしまったと聞いたが、私としては復活させた方が良いのではないかと思う。無くなった経緯を教えてください。

<会長>

生産者が構成員として入られるかどうか、もし無くなるのであればということか。

<委員>

もうすでに無くなっていることを生産者から聞いた。前は代表者が出ていたが今は無くなってしまい、行政になかなか意見が言えなくて困っていると聞いた。

<事務局>

認定農業者の代表として、吉田委員様に入っている。丹波ひかみ農協様や、それを使う料飲組合の組合長様なども代表として入っている。

どういところからそのような情報が入ったのかを教えてください。

<委員>

学校給食を考える会で、生産者とお母さんたちが集まって話し合いを行った場で聞いた。

<事務局>

構成メンバーそのものは農林振興課が担当していた時とそのままであるが、農林振興課が主管の時は生産者の方が多かった。健康課に移ってからは、お母さん方の意見が入るようになった。公募委員についても前は生産者の方が何人かいらっしやっただが、健康課が主管になると、王道すぎて魅力がないと言われたこともあった。生産者にも公募委員として来てほしいと思ったが、応募されなくなった。公募委員に生産者がいらしたときは、農薬についてのノウハウなど私たちが学ぶことがたくさんあり、土から野菜を作ることの大切さも食育推進会議で学べたと思っている。そのため、生産者枠を無くした訳ではない。

<委員>

有機農家さんから聞いた話だが、丹波市は有機農産物が余って破棄している状態だと聞いて、勿体なく思った。それにも関わらず、他県から給食の野菜を買っていて、有機野菜はコストがかかると言われるが、他県からの流通コストをかけて農薬を使用した野菜を買うのと、流通コストをかけずに丹波でできた有機野菜を買うのとでは、値段としては同じくらいと聞いた。給食の野菜は市場の一番高値で取引しているから、有機農家が給食に野菜を卸すことは悪くない話であり、市島町などは有機栽培の歴史があるので、価格が安定しているうえに生産者があふれているのが現状だと聞いた。丹波市では食品ロスについて熱心だと感じているが、捨てていると聞いた時にえっ...と思った。市民への食育にもつながると思うので、国が行っているオーガニックビジネスの実践拠点づくり事業の利用についても、丹波市で検討いただけないかと思っている。有機農家さんと学校給食との契約栽培や、農水省が推進している地産地消コーディネーターの設置、野菜貯蔵庫の設置等が現実的な取り組みではないかと思った。しかしこのようなことを生産者から行政へ言える場がないと聞いたので、行政と話し合いができる場があると良いのではないか。

<会長>

学校給食については学校給食運営協議会というものがあり、直接的にはそこが関係しているが、答えられる方があればお願いしたい。

<事務局>

今のご意見は、もし再編する場合にそのようなことができるように、メンバーの構成と公募委員様の選定をする際には配慮したい。また学校給食の話聞いて、学校に野菜を搬入するまでが凄く大変であることをこの会議で学んだため、そのような場は設けていきたいと思う。

<委員>

学校給食の納品は、農協が仲介することがある。給食側から農家へ「こんな食材ないですか」と呼びかけを行い、農家さんが「これ出せませう」というように納品を行う形になっている。これは農協の一部の生産者になる。その他は、市場からの購入や農家から直接納品される部分があると思う。これらについては学校給食の運営委員会の中で話されるとよいのではないか。

有機については、有機研究会というものがある。そこは農業振興課が事務局になっていると思うので、行政とつながりはあるのでは。

<事務局>

このことについては、農業振興課の部長に伝えておきたいと思う。

<会長>

会議の見直しの一つには、食育推進会議と健康福祉推進協議会の構成員の選出の重なり

が大きいところも関係している。会議を1つにすることで人数が若干増えるかもしれないが、構成員をどうするかについての議論は一体となるうえで当然行われると思う。

関連して県の農産物について、地産地消で県産品を使うように言われる。使用割合や品目ごとに目標数値を出されるが、県産品と言われても、例えば隣接する福知山から安くて品質の良い京野菜などが入ってくることは地産地消とは違うのか？というの難しい問題。また、学校給食に供給しようとする値段を抑えなければならないが、丹波市の特産品はブランド化して高く売ろうという政策であり、「地産地消」という言葉は簡単だが実際は難しい。

芦屋市の学校給食はとても進んでいて、一流シェフが学校に教えに来てフレンチのようなものを提供するなど、レシピも豊富で本も出ている。100%地産地消と言われるが、ほとんどが淡路産のもの。芦屋市の施策で淡路市との地域おこしなどがあり、計算では100%になっている。文科省の指定で芦屋市は地産地消の研究を、たつの市は伝統的食文化継承の研究をしている。

丹波市でも学校給食運営協議会で、丹波市産の使用率などの数値が出ると思うが、重量ベースでの統計の取り方なら、かぼちゃやじゃがいもなど重い物を食べさせたら数値は上がる。しかしそれでよいのか？そういうものではない。なので、それぞれの立場でご意見を出して頂きながら議論したい。

食品ロスについても、丹波市では栄養教諭が学校で教えたりしているが、そのようなことをしているところは県内でもほとんどない。この点でも進んでいるとは思っている。

<委員>

協議会を1つにすることについて、私は丹波市で7つの会を抱えていることもあり、ぜひ縮小していただければと思う。

<会長>

校長会でも、そのような実態がある。私も3、4つの掛け持ちをしており、それは大事なので良いが、再構成して一定の役割を終えるというか、14年を区切りに成果は出ているので、次に発展した形で再構成というのはある話かと思う。今日出た話を踏まえてもらえたらと思う。

8 その他

<会長>

このあたりで意見交換を終わりにしたい。言い忘れたこと等があれば、また健康課の方にお伝え頂けたらと思う。それではこれまでの一定の成果を踏まえて、これまでの型の食育推進会議は廃止され、新しい型の会議に再編される。

<事務局>

長時間にわたり、貴重なご意見をありがとうございました。会長様からもお話があったが、今年度末で委員の任期が終わる。2年間大変お世話になり、ありがとうございました。また食育活動が活発になり広がったのも、皆様の努力とご協力のおかげでございます。来年度以降の新しい委員の選出については、本日頂いた意見を参考にして、きっちりと協議を重ねてまいりたい。

9 閉会

<会長>

それでは最後に、職務代理者から閉会のあいさつをする。

<職務代理>

長時間お忙しい中、ご意見を頂き、ありがとうございました。

コロナ禍において、それぞれが色々なことを考えて下さり、新しいことをしてくださっていることがよく分かった。これからも続くので、また色々な知恵やアイデアが出てくるのではないかと思う。推進委員会についても、これから大きく変わっていくと思いますが、よろしく願いいたします。